増野家文書

松平定信著

国本論

増野虎発記

整理番号
１３袋　４

14

（承前）

一　人情は天下一つにして、我が悪(にく)むところ好むところは、また人の悪むところ好むところなり、我が心をおして是をはかれば、天下の人情胸中に歴然たり、されど一人の私を以てはかるべからずなり、人君常に思うべし、宮室の安、妻妾の奉、衣飲(衣服飲食)の美、此の類のもの我が欲する所なり、民も亦、人々我に異なる事なし、然るに民、宮室の安を欲すれども、其の所は膝を入るにすぎず、壁には全き土なく、牖(ゆう、窓)には完き紙なし、其の窮すること甚しければ、垣牆をこぼちて薪とし、家を売りて賦税とす、其の妻妾の奉を欲すれども、不幸にして終身妻を得ざる者あり、幸いにして妻を得るとも、其の窮すること甚しければ、妻をひさぎて一日の命を全うする者あるに至る、衣服飲食の美を欲すれば糲飯腹にみたず、敝衣肌をおおわず、其の窮すること甚しければ、木皮草根を食らい、尚足らざれば人、相はむ、敝衣を脱して市にひさぎ、露身風霜の寒、肌をおかす、誠にわが欲する所をきわめんとして、下民の疾苦斯くの如きをかえりみざるはいかにぞや、人君常に是を思いはからば、人情において何の昏(くら)きことあらんや

一　それ稼穡の疾苦、誠にあわれむべし、およそ天下のこと見るは聞くより切に、是にあらざるは見るより切なり、予、幼より深窓に養われて、稼穡の苦しみを知らず、是を聞くも又疎し、いかで其の勤を知るべき、然れども遠く察し近く恕して、先ず其の大概を知る、夫れ農は四躰の勤めを忘れて三時(春耕・除草・収穫)の務におもむく、其の労甚し、春寒いまだやまず、暁霜いまだ解けざるに、飢えを忍び寒を忍びて、耒耜を手にして田野に出て、或いは荊棘をきり蓬蒿をかる、或いは春氷をくだき、墾耕し根科をつくす、墾耕再びにしてやまず、三にして休せず、水を引き糞をほどこし、ついに牛馬を以て是を耕す、ここにおいて時をはかり、宜しきを知りて浸種して終に其の種をしく、その生じてや長ずるに及べば、男は出て土泥を平らかにし、婦女は田に入りて植ゆ、泥塗躰にまぶれ傴僂(うる)□(吻ヵ)むが如し、ここにおいて農興して其の稂莠(ろうゆう、雑草)を去る、燠気(うき)金を鑠し(とかし)、田水湧くごときころ、衣を脱して田に入り、背をさらして耕耔をなす、掻沙(かきすな)して指のびず、傴僂して腰おれんとす、今日の耘する所すでに尽くれば、昨日の耘する所また莠を生ず、休まんとすれども休むことあたわず、晨より夕に至りて是を以て常とす、熱秋湿蒸苦しんでは田水を掬(きく、すくう)してのみ、身体疲倦すれば田器を枕にして畦上に眠る、老父幼艾を伴いてかれい(餉)を送る、ここに至りて皆畦上に登り、土泥払わずして手にて是を喰らう、耘耕の苦しみすでに終われば浮根浮葉を去り、又は田水を損益し鳥獣を逐去す、寒風冷露肌をおかすころ、草

15

を集めて田中に守舎を造る、方数尺にして漸く膝を容るべし、寒夜眠らず風霜骨を砭(いしばり)す、炉火の設なく緒絮の温なし、幸いにして人畜の傷残なし、終に□□□□に至れば、水を干して是を苅穫す、婦子出て春揄簸蹂す、これ稼穡の大概なり、其の場圃に植ゆるに、九穀及び漆・柞・松・柏・桑・梓の類を以てす、又皆土を墾し糞培して是をなす、これのみならず婦女は又蚕桑の勤めあり、それ農の苦しむ事かくの如くにして、常に賤しめられ常に虐げらる、実に農の不幸あげて言うべからず

一　什一(十分の一)の税は天下の中正なり、今に至りては五公五民、六公四民、七公三民の税あり、況や貢賦の類あげて数えがたし

一　場圃に賦あり、家産に賦あり、戸及び牖に賦あり、或いは女子年幾何までは賦をいたす事いくばく、又は布を椎し酒を椎し、又、榛・柞・菽・麻の類みな貢せしむ、夫れに民父子五六人一室におり、枕衾を共にす、農事のいとま別室を作らんとすれども、賦をおそれてしかせず、牖をうがちて灯火の費をはぶかんとすれども、賦を恐れてしかせざるなり、人君よく思うべし、宮殿楼台を作るに工匠その直(あたい)をはかる、

16

其の費数鉅万なれば是を民にとる、民の室を築くや其の賦をいだす、千乗の君、宮室を作るに自ら弁ぜざれば是を民にとる、民、儋石の貯え

なくして其の舎を作るや賦を出す、何ぞ相もとるの甚だしき、又女子長ずるに至るまで賦税を出す、人君よく思うべし、人君の子生ずるや玩好弄物善美を尽くし、その嫁をや、是又費数万に至る、□□(必用)にとりて弁ぜざれば必ず是を民にとる、民の子を生ずるや其の賦を出す、人君何ぞ斯くの如くの幸(事)として、人民を椎するの類は錙銖(しゅ)の利を下と争う事にして、国体を失い天職にもとる事甚し

一 常の貢する所、米一石帛一縑なれば、其の阻却換易及び苞苴賄賂に費やす所、ほとんど三倍に至る

一 収穫のころ有司数十百人阡陌(せんぱく)を巡行す、来たりて至ること遠ければ必ず民家に宿す、其の供すること少しくおろそかなれば、或いは賦税をまし、或いは力役を与う、民これを恐るること虎狼の如し、道を造り橋を造り、泥土中に匍伏して是を迎えて恭敬す、飲食衣服枕衾の類、美を尽くし善を尽くして供奉す、ただ其の害を受けんことを恐るる故なり

一 民賦役にあたれば道路橋堤を造り、又は旅人を送り又は伝馬を出す、農時といえども役に当たれば耒耜をすてて糧を負いて、或いは五六里或いは十余里を経て市中に出づ、終日力を労して猶一銭を得ず、かえって嘔杖(酷使カ)せられ、又は怒訶せらる、役より帰りて田を見れば、稂莠生じて又おさむべからざるに至るあり

17

一 毎年春に至りて糶す、本より民の乞う者にはあたえ、しからざればしかせず、その糶する所の米黄腐喰うべからず、或いは赤米にして舂揄すれば半に至り、或いは虫鼠の残りを歴て其の数にたらざるの類なり、民秋冬に至りて又米を出して是を償のう、其の出す所の米、有司換易して精粋なるにあらざれば入れず、民恵をうくるの名ありて其の実なく、償のう名あれど其の実は大いにまされり、これ民をあみするの姦詐なり、人有司をなじれば必ず対て(こたえて)いう、民、乞うによって与うがゆえにかえさしむると、それ小民の情、春に至りては貯ゆる所の黍稗麦菽等もつきて、熟麦もいまだ遠ければ、やむ事を得ずして上に乞う、上より出す所の米粟、必ず喰うべからざるに至るを知れども、人情万一の幸(事カ)は求めざる者なければ、得て幸いに喰うべければ今日の飢えをたすく、ここに至りては秋冬償うの苦しみを知らず、ただ得ざる事の遅からんを恐るるのみ、終に有司に苞苴して是を乞う、乞い得ては其の米をひらき、其の喰うべからざるを見れば忿然として止まず、初めて秋冬の苦しみを知る、秋冬に至りては来年其の糶を乞うべからざるを心に誓うとも、春に至りて貯え尽くれば姑息にひかれて又糶を乞う、一年は一年より苦しみ、年をかさねて苦しみ極まる、人君よく是を察すべし

18

一 民の患ること多しといえども、前年の租を出すを尤も甚しとす、姦猾の有司、民の長を召して曰く、今年何等の経費何幾(幾何)、朝嘗の費、貢献の費何幾、財用のすでに尽き、今来年の租を出すべし、民皆頓首して退く、涕泣しようやくにして来年の租を出す、初め約するに其の出す所の租、秋冬に至りて上より是を償わんとす、約堅くして其の言終(語カ)にしるしなく、民ひそかに嘆くといえども、是を訴うれば楚撻背に至り、桎梏手足に来らんことを恐れて、声を呑んで涕泣す、来年に至りて有司、民の長をよびてまた来年の租をおさ[めし]む、有司或いは甘言してあざむき、或いは威を強くしておどす、民又しりぞきて田をうり、妻子をひさぎて其の租を出す、其の報なきこと去年のごとし、一二年にしてすでに五六年の租を出すに至る、それ劉漢の世は民に田租の半をたまい、或いは田租をことごとくゆるす、然るに今かくの如きはいかがぞや、人君の実に恥ずべき事なり

一 国家大費ある毎に必ず黄金数万をして民より出さしむ、一県何幾、一戸何幾の数を以てし貧富の品なし、壱是(いっし、すべて)に□(これを)とる、其のうちの多少厚薄は又猾吏の心に有り、それに民は田租なお是を苦しむ、況や場圃及び戸牖布帛の賦をや、是のみならずして人に賦し、酒茶を搉し、又前年の

19

一 粗を出さしめ、又は故なくして金銭を出さめしむるの類、実に堪えざる所なり、此の外、聚斂苛政猶しるすにいとまあらざるなり、人禍大概斯くの如くにして天地変災、時となくして至る

旱すでに甚だしく田水忽ちにかれて、稼禾(禾稼)見るが内に枯槁し、草木みな黄ばみ変ず、ここにおいては金鼓をならして天に□□□□、只農民のたのむ所、井もすでに尽くれば、渓水を遊びし(争いて)田に導く、渓水即日に涸れば遠く江河の水をくむ、老幼皆出て人毎に壺・瓶を提げて往反二三里にして数升の水を持して是をそそぐ、其の事終わらずして忽ちに涸る、ここに至りて力窮し、ただ喝々然として昊天を

20

のぞむ、号呼愁(悲)泣してしてやまず、これ昊天の苦しみなり、霖雨数日にして晴れざれば、農民の憂いつねに洪水の溢るるに有りて、皆郊野に出て土をはこび、堤梁の蟻穴をおぎなう、ついに洪水蕩々として山を兼ね陸にのぼるの勢いあり、人々みな堤上にあつまり、大いに呼ばわりて洪水をふせぐ、水勢いよいよさかんにて、人力のさそうべきにあらず、忽ち梁をやぶり漲り来る、其の勢い盆水を覆すが如し、河辺の家屋ただちに漂流す、老幼道にまよい、人々号呼して奔走し、或いは屋上に登り、或いは林樹を攀ってただよい、樹抜ければ、これも同じく魚鼈の腹に葬らる、幸いにして全きも、食つき力窮すれば終に水

21

中におちて死す、洪水数日にして引き去れば万頃(ばんけい、広い土地)一毛のたつるを見ることなし、父子皆相失い、只溺死のすみやかなるをうらむのみ、是れ水潦の苦しみなり、或いは凶年五穀実らずして人煙終に絶ゆ、魚・蝦(がま・えび)・螺(にな)・蛬(虫類)をとりて喰い、尽くる時はまた木・皮・草・根を喰う、終に疾をつとめ衰えたるを曳いて、枵腹(ひだるばら)にして呻吟す、面は人色なく、形は鬼魅(きみ、ゆうれい)のごとし、気息奄々として朝夕を保つべからざるに至る、是飢饉の苦しみなり、或いは疾疫流行して方々相死し家々相疾む、一室皆疾みて食をかしぐ(炊)の人なく、薬を煎じるの人なく、死して葬る人なし、子は父の側にて死し妻は夫の側にて死す、己も又死するに垂(なんなん)とすれば、臥視して涕泣号慟(慟号)す、幸にして疾(病)療るといえども、糞培耘耔、其の時を失うによりて、禾稼枯れて稂莠繁し、人其の稼穡をおさむる事を得ず、是等疫病の苦しみなり、或いは蝗虫群飛し、山をおおい野に満ち、声は風雷の如く、集まること雲煙に似たり、一たび集まれば田中頃刻(けいこく、わずか)にして青色なし、これ蝗虫の苦しみなり、かくの如く災いあれば、民皆去りて有司に訴う、有司其の虚実を正し、数日にして是を上に聞す、諸有司を経て終に上に達す、人君是を聞いてとく有司に命じて其の疾苦を救わしむ、其の命また諸有司を経て下る、ここにおいてすでに旬月を経るなり、有司の命を受くる、また簿書を急と

として生霊を以て念せず、金銭米粟を点検し、或いは後患をおそれ、或いは文法にかかる、終に大費を恐れて救い恵むの策を尽くさず、衆[議]漸々[決]して是を行うの時、民十に三四はすでに禍にかかりて、蘇息たる事を得ず、其の金銭米粟与うるも、厚薄多少は又貧官黠胥(かつしょ)の心にあり、ここによりて窮民かえって得る事少なし、富民かえって得る事多きに至る、発稟の令、齎銭の命下れども、実恵なくしてかえって怨を下に帰す、これ聚斂の臣盗臣におとる所以なり

一

唐の徳宗(唐九代の帝)民に問うに、豊年の楽しきを以てす、実に民情を知らずと言うべし、豊年は凶年より劣れりと言えるも、更に激論にあらず、いかにとなれば、豊年は粒米狼戻して、牛馬に米を負わせ、遙かに郷に出て是をひさぐに、其の銭なお掏手して帰るべし、それのみならず貧吏豊年に乗じて租税を増し、責逋(せきほ)する者これに乗じて来たり、或いは数十年前の借る(貸す)所を責む、米粟尽くるにあらざればやまず、田夫蚕婦首を垂れて仰給せんとす、終に償い足らざれば又転じて是を借る、利息したがって倍蓰す、昔の数百は俄に数千、昔の千銭俄に万銭、一歳逃がるところ累年償う事あたわず、終に子孫に患いを残すに至る、これ豊年の

22

患いなり

一

収斂苛政、色目(しょくもく)蝟(い、ねずみ)の集まる如きが上、天旱・水潦たがいに来たる、ここによって民多く流れて商となる、夫れ商の利を得射るや、豊年においてし凶年においてす、豊年は粒米狼戻すれば多く是を買いて倉稟におさめ、それ凶年米価躍貴するに及んで糶す、ここに至って損なくして益を得、農民は常に其の術中におちて益なくして損を得、商家はここにおいて衣は文采、食は梁肉堅きにのり、肥たるに策うち、糸を履み縞を曳いて王侯に交通し、力は吏よりもまされり、農民膝行敬事する事奴隷の如し、是れ農、終に商に帰る所以なり、それ商にいまだ帰せざれば、四時身を苦しめ力を労すれども、分厘の益を得ることなく、人禍天災に逢いて桑をきり屋をくずし、田器を売り田をひさぎ、終に妻をひさぎ子を売る、泣血分袂し握手号呼す、それ夫婦の情□□(一日)あわざれば、只三秋の久しき如く思い、妻は膏沐に心なし、頭[は飛]蓬の如くにして是を思う、偕老同穴なおみてりとせず、況や今生ながらにして離る、江文通(江淹、梁の人)が、悲は生別離より悲しきはなしという、豈しからずや、夫れ父母の子を愛する天性なり、昨日見ざれば是を思う、子朝に出て夕に帰れば戸に出て侍り、また遅ければ心を安んぜず、たまたま疾病

23

あれば医を招き薬を与え神に祈る、得がたきの薬も力を極め、財を惜しまずして是を求め、招きがたきの医も秦楚を遠とせず、自ら来て是を迎う、神として祈らざるはなく、其の生を惜しむ事只疾の癒えざら

ん事を恐る、実に千金を以て一稚にかえんとも、頭をのばし刃を受くに至るも猶あえてあたえず、然るに今妻をひさぎて一二片の金を得、十余歳の子を売りて、わずか三五日の食に替う、是れいかなる理にや、共に死して益なきを知ればなり、疾苦なを堪えざれば、ここに至りて或いは溝壑に転死し、或いは盗となり、或いは邑を離れて流浪す、それ家業を捨て墳墓を捨て、敝衣涕をおおいて是(邑)を去る、四隣も亦共に涕泣して是を送る、それ親死すれば常に墳墓に至り、その見在の思いをなす、一月墓に至らざれば一月親を見ざるに等し、今邑を離れて終身又親を見ることを得ず、親戚四隣患[難]同じく、めぐみて一年あわざれば弁ずる事を得ず、故郷の忘れ難きは凡ての情なり、胡馬の北風に嘶きを、鳥の南枝に巣くうの類(文選、古詩十九首)、鳥獣猶しかり、今邑を離れて終身故郷を慕う、其の心いかんぞや、それ溝壑に転ずるは其の悲しみ言うべからず、群盗となるも又憐れむべし、民思えらく、餓死と殺死と等しく死ぬるなり、其の飢えや必ず死す、盗は幸いに

死せざるにも至るべし、よって米粟の有る所は群趨して赴く、それ陳渉(ちんしょう)秦を乱し、赤眉(せきび)王莽(おうもう)を亡ぼし、黄巾(こうきん)漢を覆し、李特(りとく)晋の首乱をなす、人君是を思い、是を恐れ、是をたち、是を養い、是を育せば長く天命に叶い、天職にあたり天禄を保ち、天民の上に立たん、是を心に銘じ骨に刻みて、造次顛沛(ぞうじてんぱい、わずかのま)の間も忘るまじき事なるべし

完